
VALENELYA
世界をつなぐ
クリスマス
M.N. Popa

どうぞ入って。あなたの席もあります。

家がにぎやかな声で満ちている人へ。
今年、空いた椅子を見つめている人へ。
贈り物が届くとは思っていなかった人へ。

私たちの食卓には、いつでももう一人の席があります。

年齢も、生まれた場所も、VALENELYAを知っているかどうかも関係ありません。
ここの世界を何も知らなくても、どうぞお入りください。

この旅は贈り物です。ある家族と好奇心いっぱいの犬、そして思いがけない場所でも居場所を見つけるクリスマスの物語。

さあ、どうぞ。Tittiはもう最初の一歩を踏み出しました。

よい旅を！
M.N. Popa

旅の道しるべ

ローマ――クリスマス・イブ	4
Amarylion	12
Draconia	26
Astralis	40
Magoria	54
Oneiria	68
Noxarium	82
Atlantis	96
Olympus	110
家に帰って	124
贈り物は続いていく	125
制作・お問い合わせ	126


ローマのクリスマス・イブ。日が暮れようとしていました。明かりのともる窓の向こうでは、ある家族がお祝いの支度をしていました。


M.N. Popa：やっと家族みんなで過ごせる夜だ！
Tatiana：今夜ぐらい、外の世界には待っていてもらいましょう。
Arianna：でも、ツリーは勝手に飾りつけてくれないよ！


Arianna：Titti、そのリボン返して！
M.N. Popa：もうプレゼントを決めた子がいるね。
Gabriele：こっちへおいで、いたずらっ子！


Gabriele：お父さん、この生き物たちを全部、本当に自分で思いつくの？
M.N. Popa：ときどき、何人かには会ったことがあるような気がするんだ。
Arianna：私はドラゴンを見たい。すぐ近くで。


M.N. Popa：たくさん本を作ってきた。でも、まだぴったりの一冊が見つからないんだ。
Tatiana：あなた、誰にぴったりの本なの？
M.N. Popa：笑顔を必要としている誰かに、かな。


Arianna：見た？ ページが動いてる！
Tatiana：あなた……これ、普通なの？
M.N. Popa：私の本の中ではね。うちのテーブルでは、普通は起こらない。


M.N. Popa：みんな、そばに！ 手をつないで！
Tatiana：Tittiは？
Arianna：ここにいるよ！


M.N. Popa：待って……このページは私が書いたんじゃない！


Tatiana：えっ……ここはどこ？
M.N. Popa：Amarylionだ。
Arianna：お父さんの本に出てくる街？
ローマは夜でした。けれど、扉の向こうの街は目を覚まし始めていました。


Tatiana：あなた、私たちのクリスマスはどうするの？
M.N. Popa：まず、ここではどう祝うのか見てみよう。
Irena：それなら、ひと口どうぞ！


M.N. Popa：Aldren！ Kaelor！
Aldren：どこかでお会いしましたか？
Gabriele：この人が作者のM.N. Popaです。でも今日は、やっぱり案内してもらわないと！


Tessa：Darian、荷車に気をつけて！
Darian：あのリボンを止めてくれ！
Arianna：一本つかまえた！


Aldren：Tessa、あそこへはどうやって下りる？
Tessa：横の階段からよ。来て！
Gabriele：Tittiを見て。最後の一本を見つけたよ！


Tessa：仕事はあとでもできるわ。さあ、ごはん！
M.N. Popa：私たちの席もありますか？
Darian：もちろん。Aldren、椅子を足して！


M.N. Popa：私は今日のことを書いていない。
Darian：私たちはページとページの間でも暮らしているんですよ。
Arianna：じゃあ、今日は一緒に作ろう！


Tessa：おいで！ 楽隊がここを通るわ！
Gabriele：Arianna、やってみようか？
Arianna：私についてきて！


M.N. Popa：一曲、踊っていただけますか？
Tatiana：あなた、ステップは知ってるの？
M.N. Popa：理論上は！


Arianna：私たちのリボンだ！
Gabriele：まだちょっと曲がってる。
Tatiana：だから、すぐ見つかるのよ。


Arianna：あそこが市場だ！
Gabriele：それに、あの橋……リボンを拾ったのは、ちょうどあの下だったね！


Tessa：少し詰めて！ また友達が来たわ！
M.N. Popa：私たちはお客だと思っていました。
Darian：お客さんだって、お盆ぐらい運べますよ！


Tatiana：おかげで、自分の家にいるようでした。
Darian：また会いに来てください。
Arianna：ほかの世界では、どんなふうに祝うのかな……


Arianna：お父さん……あれ、翼？
M.N. Popa：どうやら旅はまだ続くようだね。
来たときは、どこへ行けばいいのかもわかりませんでした。今は、また会いに帰ってこられる人たちがいます。


Arianna：お父さん、見て！ 山の中に街がある！
M.N. Popa：Carpaticaだ。ここではどう祝うんだろう……
Tatiana：あなた、行ってみましょう。
Draconiaを歩いてきたM.N. Popa一家は、Carpaticaにたどり着きました。


Tatiana：いいにおい！ もうお祭りみたい。
Nerina：もうすぐですよ！ でも、誰か配達を手伝ってくれないかしら？
Arianna：私たちがやる。ね、お父さん？



底なしの石は広場の真ん中にあり、その周りではいつもの暮らしが営まれていました。


Gabriele：お父さん……車輪は別のところへ行きたいみたい！
M.N. Popa：荷車は押さえる。みんなは夕食を守って！
Nerina：直せる人を知ってるわ！


Branik：直しておくよ。その荷物を運ぶのを手伝ってくれるかい？
Gabriele：決まり！ はい、金づち。
Tatiana：終わったら、一緒に夕食に来てくださいね。
Cineritiの中庭で、車輪は元どおりになりました。困っている人には、必ず誰かが手を貸してくれました。


Vesna：共同の食卓へ届けてね。みんなに、よいお祝いを！
Tatiana：ありがとう！みなさんも待っています。
Gabriele：今度こそ、車輪に頑張ってもらわないと！


Ordan：配達は終わったかい？ じゃあ、挨拶する時間はあるね。
Arianna：Ordan、一緒にお祝いに来て！
Ordan：喜んで。その前に、空からCarpaticaを見てみるかい？


Roxana：ようこそ！ 私はRoxana。こちらはLarissa。私たち、姉妹なの。
Larissa：そして、この子がRex！ お祝いに間に合った？
M.N. Popa：もちろん！ 夕食でみんなと会おう。


Tatiana：みんな大丈夫？ Tittiも？
Gabriele：うん、お母さん。一番いい席を取ってるよ！
Ordan：それじゃ……出発だ！

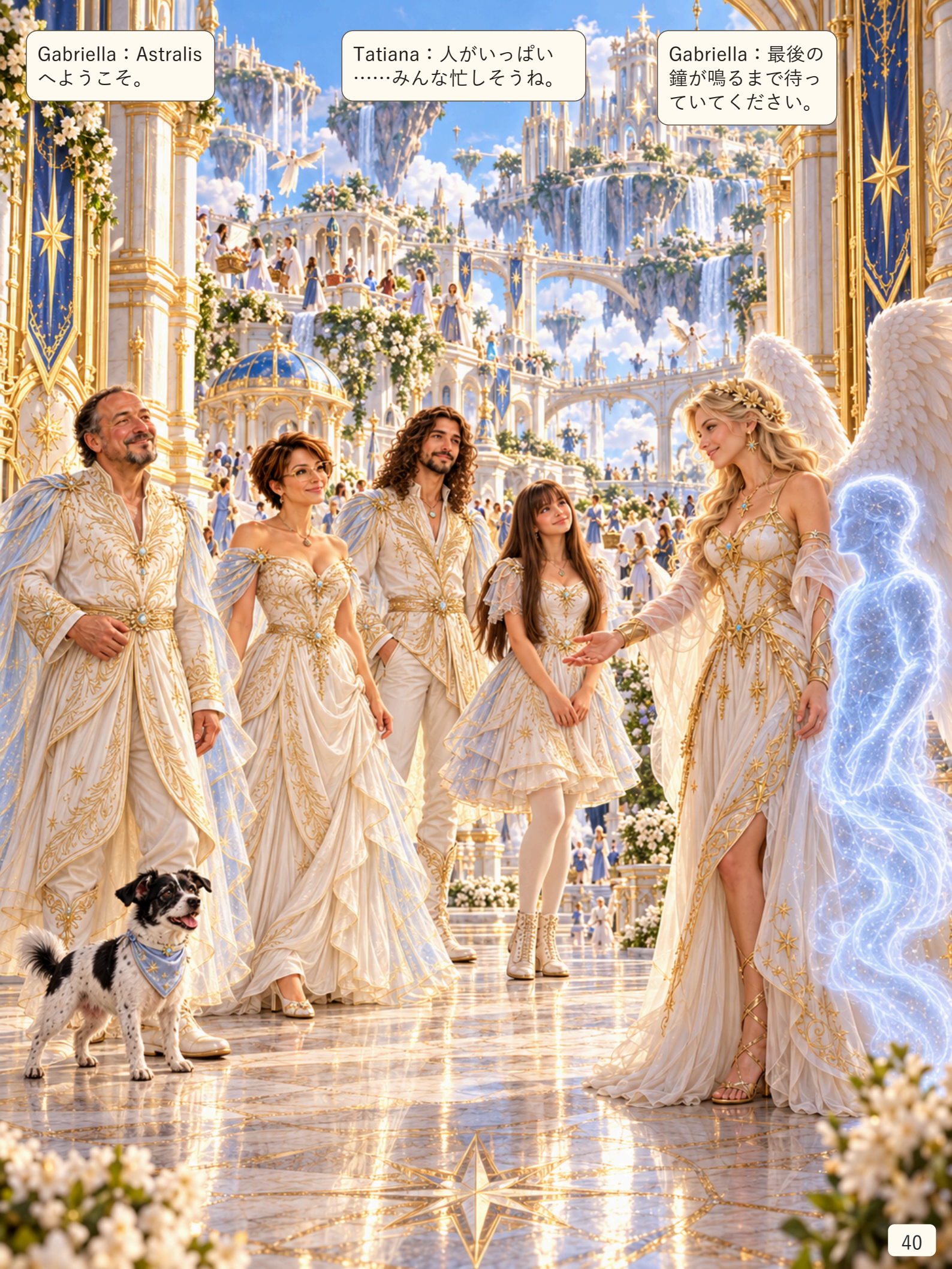

Arianna：あそこ！広場の岩だ！
M.N. Popa：今朝はまだ道を歩いていたのになあ……
眼下では、Carpaticaのテラスにお祝いの明かりがともり始めていました。


Ordanは一家をDrakhenの中庭へ送り届けました。
地面に下りるより先に、音楽が迎えてくれました。
Gabriele：もう戻るの？ もう一周したいな！
Tatiana：あとでね。聞こえる？ 踊りに誘われているわ！


Nerina：ここへ一歩……それから回って！
Gabriele：待って！ もう向こうまで来ちゃった！
Tatiana：あなた、支えて！ 目が回る！


M.N. Popa：来たね！ 席を取っておいたよ。
Branik：車輪はまだ回ってるかい？
Gabriele：ばっちり。休みたがっているのは、僕の足のほう！
食卓を囲む輪には、新しく来た人の席がいつもありました。

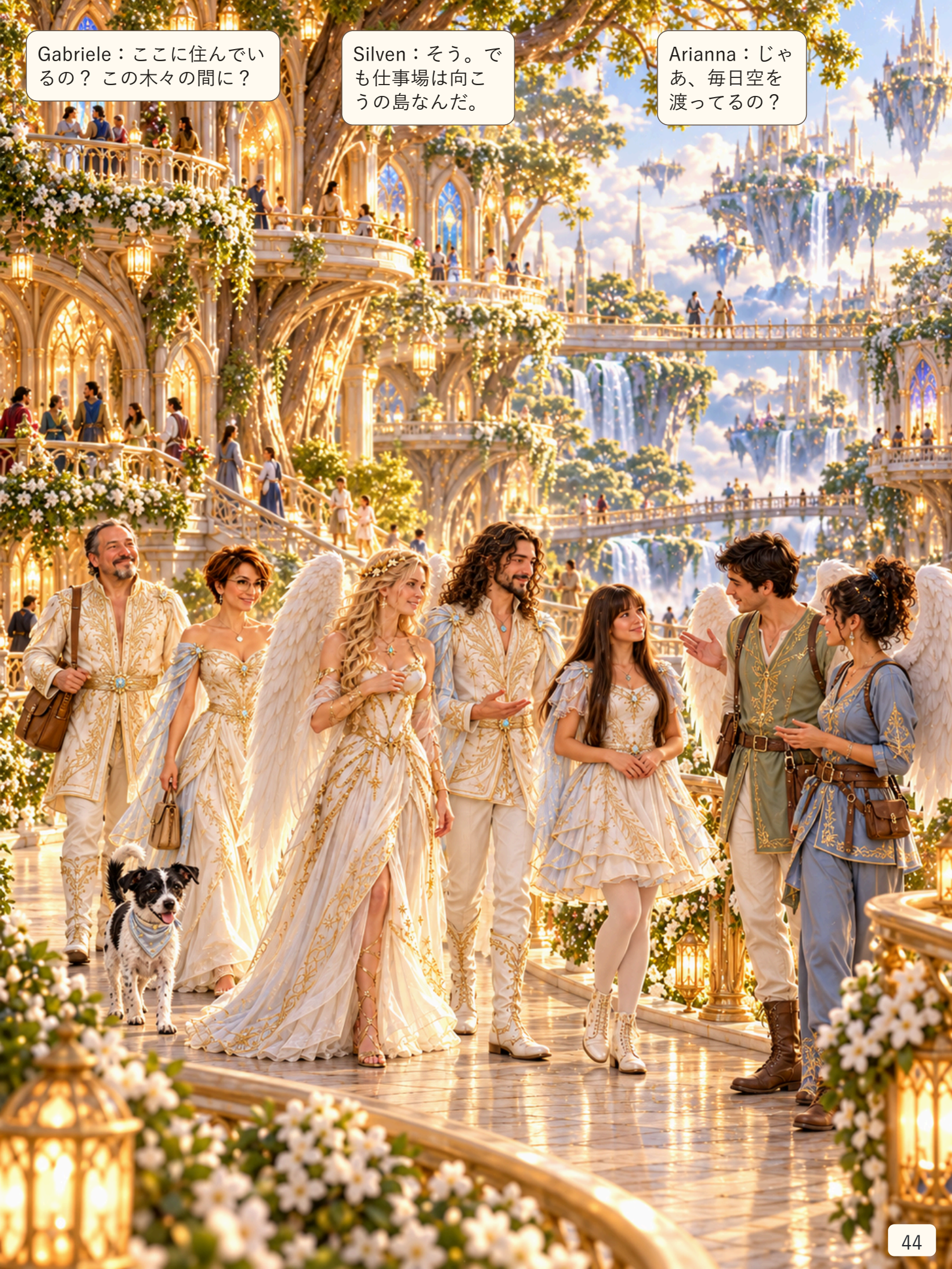

Arianna：お父さん、また会いに来ようね？
M.N. Popa：Ordanに、この旅の続きを話す約束をしたからね。
Ordanや新しい友達に別れを告げ、M.N. Popa一家はまた歩き始めました。

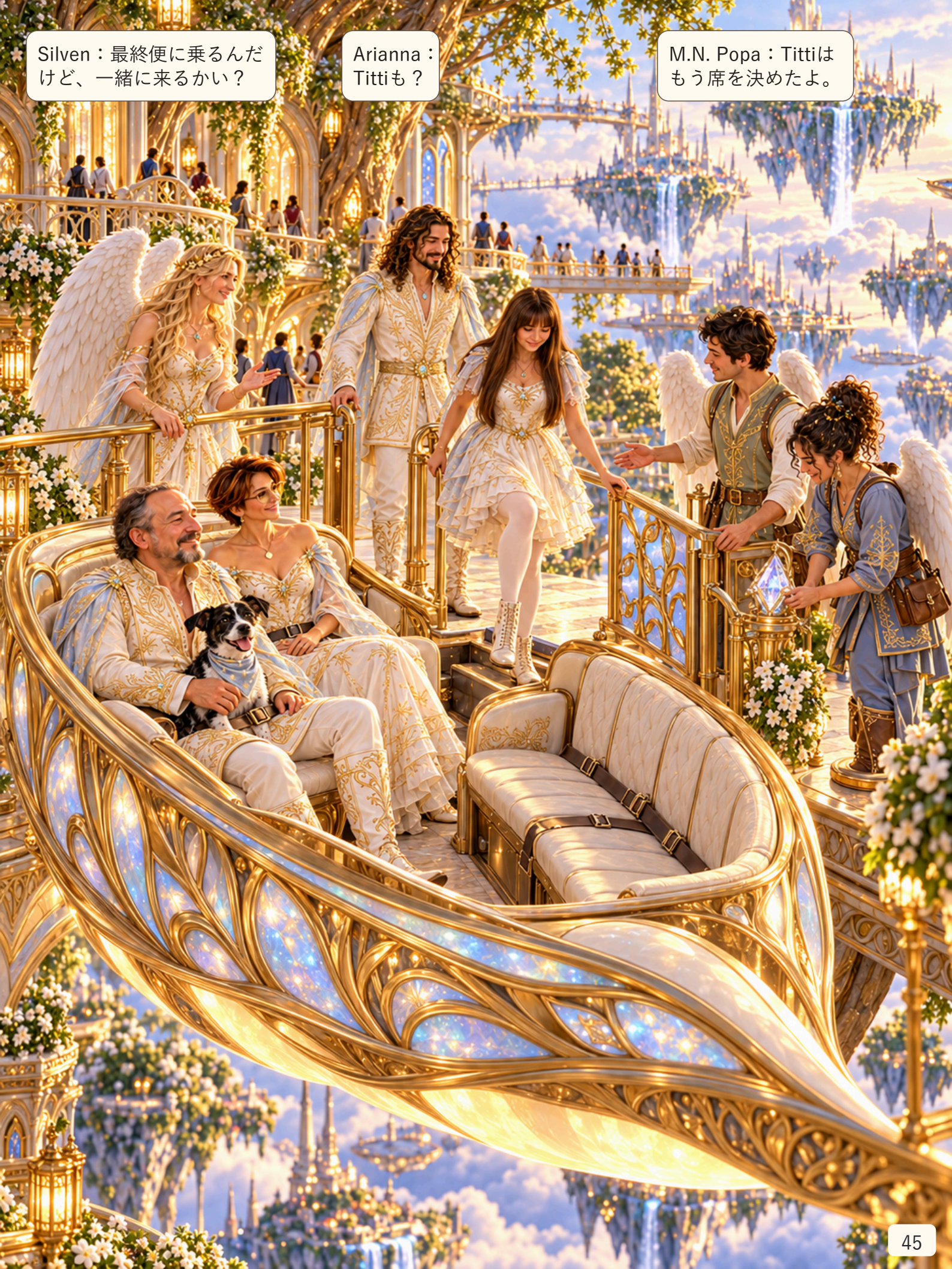

Gabriella：Astralisへようこそ。
Tatiana：人がいっぱい……みんな忙しそうね。
Gabriella：最後の鐘が鳴るまで待っていてください。


Tatiana：お祝いはいつ始まるんですか？
Gabriella：最後の鐘が鳴ったら、みんなで食卓を囲みます。


Elaria：あなた、これが最後だって言ったでしょう。
Teren：そうだよ。今、仕上げているところ。
Tatiana：誰かに似ていると思わない？


M.N. Popa：私だって、あと一ページ書くだけだったんだ。
Tatiana：ええ。三時間後にも、まだそこにいたわね。
Elaria：今夜はテラスへ来て。みんなで食べるものは、私たちが持っていくわ！


Gabriele：ここに住んでいるの？ この木々の間に？
Silven：そう。でも仕事場は向こうの島なんだ。
Arianna：じゃあ、毎日空を渡ってるの？


Silven：最終便に乗るんだけど、一緒に来るかい？
Arianna：Tittiも？
M.N. Popa：Tittiはもう席を決めたよ。


Arianna：お父さん、島がいっぱい！
Gabriele：これが、仕事に行く道なの？
Silven：風が強すぎない日はね。


Tatiana：鐘の音……
Gabriella：もうすぐ最後の鐘が鳴ります。
M.N. Popa：あそこを見て。店が閉まり始めた。


Elaria：来てくれたのね！ 席を取っておいたわ。
Tatiana：無事に仕事を終えられたんですね！
Teren：今度こそ、本当にね。


M.N. Popa：M.N. Popaです。お会いできてうれしいです。
Arianna：お父さんは作家なの。
Aurel：それなら、今夜は聞き役だね。ここには話がたくさんある。


Silven：そちらでは、クリスマスをどう過ごすんだい？
Gabriele：みんなで食卓を囲むんです。誰も最初に席を立ちたがらなくて。
Tatiana：特にデザートが出てくるとね。


Tatiana：あなた、いらっしゃい。
M.N. Popa：ゆっくり。このステップは知らないよ！
Tatiana：私についてきて。


Gabriella：Paxにも何か持っていきましょうか？
Tatiana：待って、これも入れるわ。
M.N. Popa：行こう。旅の話もしてあげないと。


Pax：君も踊ったのかい？
Tatiana：証人ならいますよ。
目の前のAstralisでは、お祝いがまだ続いていました。


Arianna：お父さん……あの森のかけらが、こっちを見てる。
M.N. Popa：森全体に見られていなければいいけどね。
Gabriele：それはどうかなあ。


Tatiana：そっとね、Titti。向こうから来るのを待ちましょう。
Gabriele：あの耳、見た？
Arianna：扇が二つみたい！
M.N. Popa：Titti、着いたばかりなのに、もう遊び相手を見つけたんだね。


Nadia：Magoriaへようこそ！
森と知り合っていたの？
Arianna：森のほうから、私たちに会いに来たの。
M.N. Popa：Tittiにはもう友達ができました。


Tatiana：どうしたら全部見て回れますか？
Nadia：まず根元から。それから、あそこへお連れします。
Gabriele：ずいぶん上まで登るんだね。
Nadia：ありがたいことに、全部階段じゃないのよ。


Gabriele：水を上へ運ぶの？
Brom：それもね。今日は買い物した品物を運んでる。
M.N. Popa：うちにも欲しいな。


Arianna：小さいのは妖精用？
Milo：そう。大きいのは、お祝いの広場へ持っていくんだ。
M.N. Popa：根元のほうから来て正解だったね。
Tatiana：あなたは、においについてきただけでしょう。


Lilia：こっち！ うちを見せてあげる。
Arianna：あの二枚の葉っぱの間？
Lilia：そう。待って、窓を閉めるね。リスが入ってきちゃうから。


Tatiana：下からは、こんなに広いと思わなかったわ。
Gabriele：広場を見て！もう明かりを飾ってる。
Nadia：次はあそこへ行きます。
M.N. Popa：あのほうき、駐車してあるんですか？


M.N. Popa：やっぱり、あのほうきは本当に飛ぶんですね。
Nadia：ええ。でも、まず地面でできることから始めましょう。
Gabriele：もうそれくらいでいいんじゃない？
M.N. Popa：少なくとも、雨が降ったら全員で雨宿りできる。
Arianna：Nadia……私もやっていい？
Tatiana：これはクリスマスの食卓に飾りたいわ。


Arianna：金色の髪にしてみたい。それと、お姫様のドレス。
Nadia：一緒にやりましょう。まず、何が欲しいかよく決めてね。
M.N. Popa：この小さな壺は空っ……
M.N. Popa：壺が空かどうか、聞いただけなのに。
Gabriele：これで二人に共通点ができたね。


Arianna：ごめんなさい！ そんなつもりじゃ……
Nadia：元に戻せるわ。でも二人とも前の姿になる。同じ魔法だから。
Arianna：うん。全部元に戻して。
M.N. Popa：その髪、気に入っていたの？
Arianna：うん、でも……
M.N. Popa：けど、これも悪くないな。
M.N. Popa：その髪はそのままでいい。私はこのひげを残すよ。
Tatiana：ほら。もう満足している人が一人。


Nadia：明かりをともしてみましょう。 M.N. Popa：今度は私が。


M.N. Popa：これで合っていますか？ Nadia：明かりはつきましたね。 M.N. Popa：ええ。場所が違うけど。


M.N. Popa：はい。君がつけて。 Arianna：まだ信じてくれるの？ M.N. Popa：ちょっと離れるまで待ってね。


Lilia：これ、あなたたちが作ったの？
Tatiana：私が。少し手伝ってもらったけど。
Gabriele：お父さんは花火担当だったんだ。
M.N. Popa：そして今夜の公演は終了です。


Nadia：本当に、その姿のまま出発するの？
Arianna：私はそうする。
M.N. Popa：私も。このひげに愛着が湧いてきたよ。
Tatiana：Titti、ご挨拶しましょう。もう行かなくちゃ。
みんな：メリークリスマス！


Arianna：水みたい……でも、ぬれない！
Tatiana：袖を見てごらん。
M.N. Popa：Tittiまで色が変わってる。
Gabriele：においがするか、確かめてるみたい。


Lumen：Oneiriaへようこそ。私はLumen。こちらはOmbraです。
Arianna：さっきまで反対側にいたのに！
Lumen：どうぞ。お祝いまで、まだ散歩する時間があります。


Tatiana：ここからだと、あの家が曲がって見えるわ。
Gabriele：僕のほうへ一歩来て。
Tatiana：あら。今度はまっすぐ！
Lumen：家はずっと同じ場所にあります。届く光が変わるのです。


Arianna：Titti、こっちだよ！
Gabriele：もう一つ見えていたんだね。
M.N. Popa：目には二つ。でも鼻には一つだった。


Arianna：お母さん、見て！ひだが薄紫になった。
Tatiana：もう一度動かして。今度は金色も見えるわ。
M.N. Popa：こんな服なら、朝、色選びに悩まなくて済むね。


Sirel：贈り物につける飾りを作っているの。やってみる？
Gabriele：想像するだけでいいの？
Sirel：一つ決めて、頭の中にはっきり思い浮かべてみて。


Gabriele：結び目を考えていたんだけど。
Arianna：結晶になっちゃったね！
M.N. Popa：それでどうやって包みを結ぶのか、見てみたいな。
Sirel：お祝いに持っていって。飾れる場所はきっとあるわ。


Sirel：広場に行くの？ 一緒に行きましょう。
Tatiana：これは私が持ちます。
M.N. Popa：じゃあ、私はお盆を。
Gabriele：最初に目をつけていたよね。


Arianna：飾りを作っていた人たちもいる！
Lumen：今夜はみんな、ここに集まるのです。
Tatiana：お手伝いができてよかったわ。

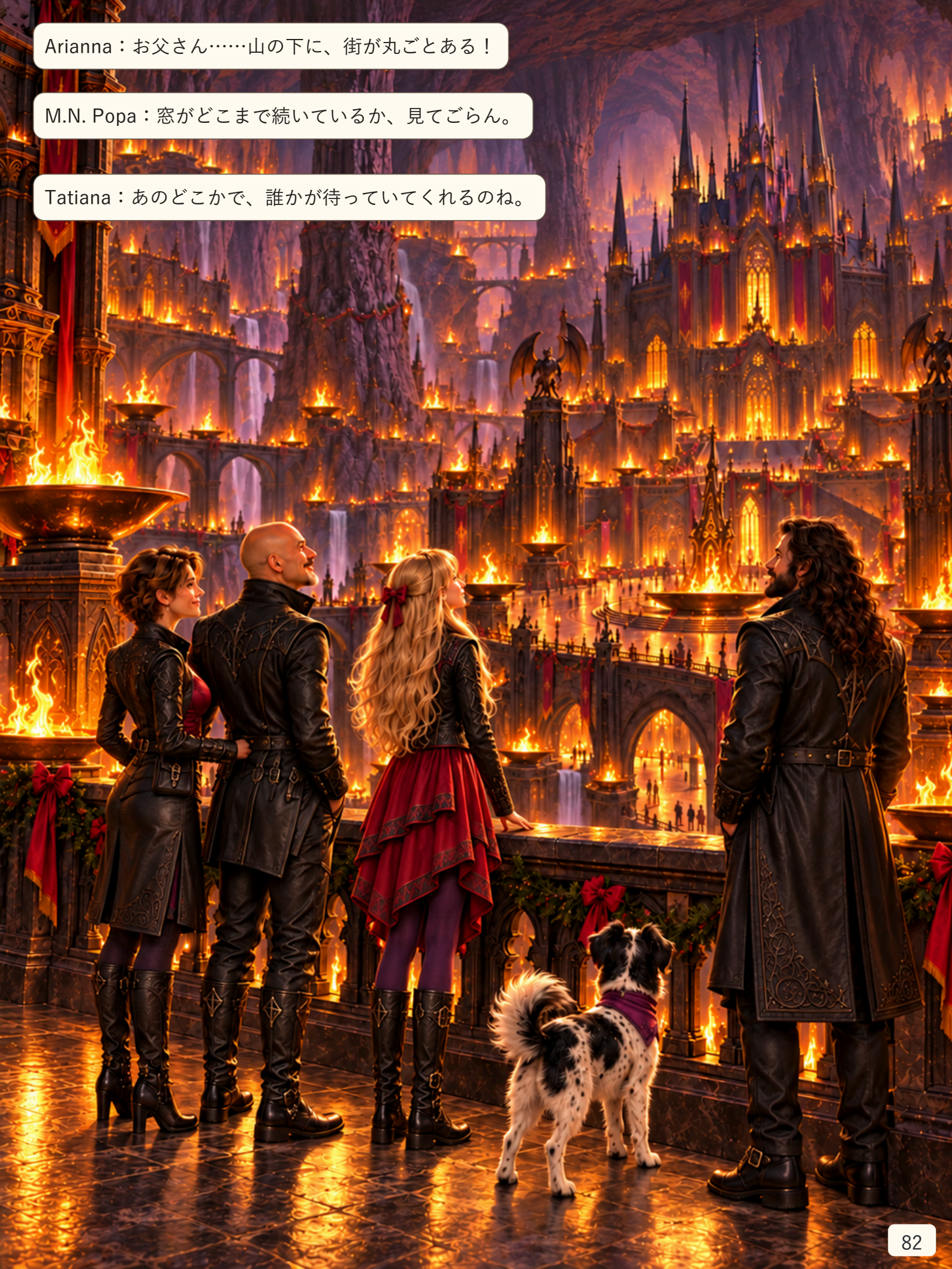

Lumen：食卓の支度ができました。色選びを手伝ってくれますか？
Tatiana：クリスマスなら、私は赤ね。
M.N. Popa：それに金色。
Lumen：一緒に思い浮かべてみましょう。


Arianna：ここまで広がってくる！
Gabriele：窓を見て。
Tatiana：広場全体が、おめかししているみたい。


M.N. Popa：ほら、金色だ！
Arianna：Gabriele、あの雪の結晶！
Gabriele：ほらね？ ちゃんと居場所が見つかった。


Sirel：どうぞ。席を取っておいたわ。
Tatiana：すてきな食卓ね。
Lumen：友よ、メリークリスマス。
みんな：メリークリスマス！


Arianna：雪の結晶はここに置いていくの？
Lumen：もちろん。あなたたちが持ってきてくれたのですから。
M.N. Popa：じゃあ、私たちのクリスマスも少し残していこう。
Tatiana：Titti、いらっしゃい。ご挨拶しましょう。
Gabriele：次はNoxariumだ。


Arianna：お父さん……山の下に、街が丸ごとある！
M.N. Popa：窓がどこまで続いているか、見てごらん。
Tatiana：あのどこかで、誰かが待っていてくれるのね。


Lucien：Noxariumへようこそ。私たちが案内します。
Bony：道順を用意したよ。
Lucien：全部の台所を通るのかい？
Bony：だいたい全部。


Veshra：気をつけて。パンはまだ熱いよ。
Gabriele：一つもらって、みんなで分けよう。
M.N. Popa：まずは一つね。

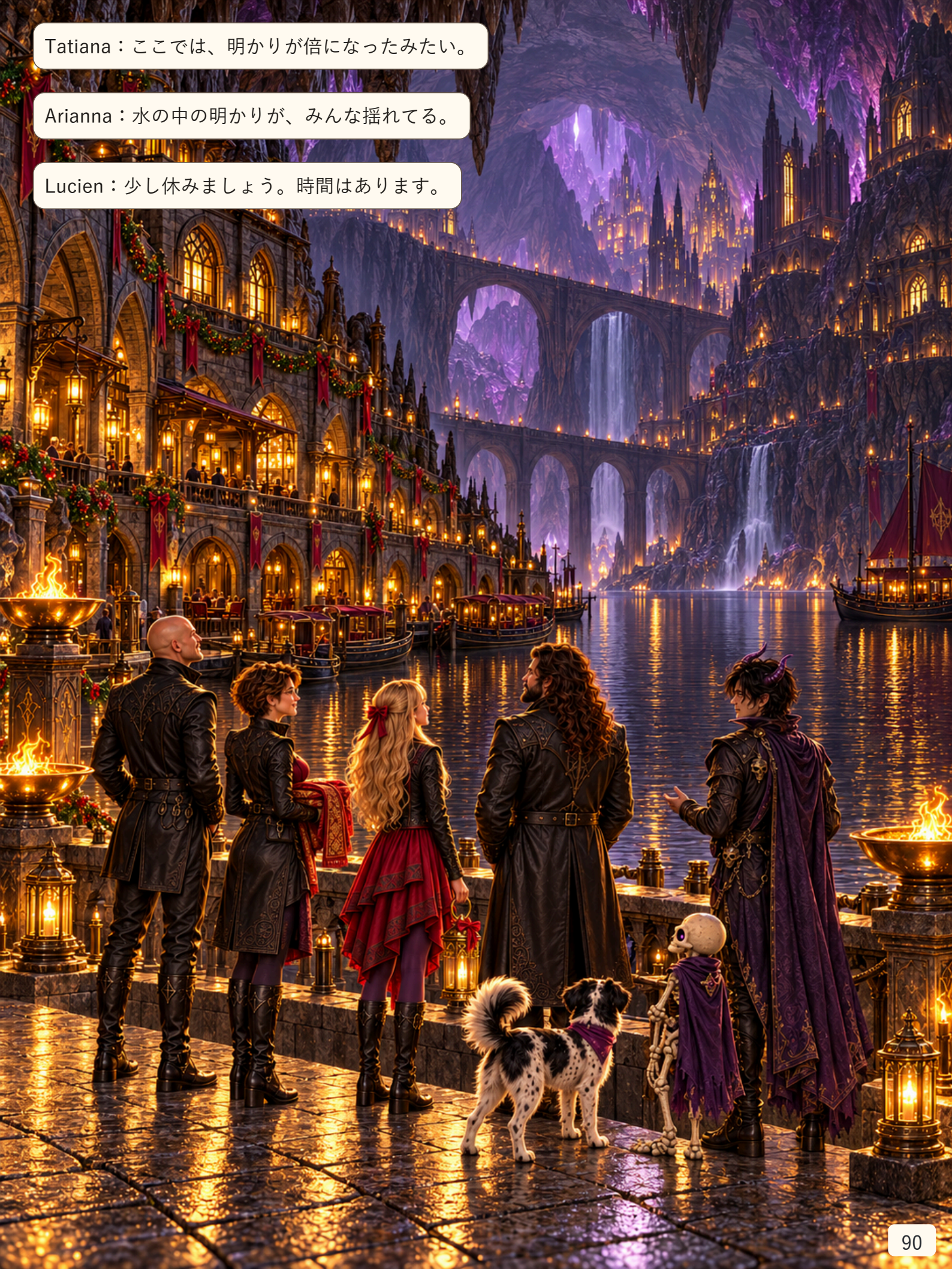

Grimmo：これを押さえていてくれるかい？
Arianna：赤いリボンもつける？
M.N. Popa：こうですか？
Grimmo：それなら、君たちがお祝いに持っていっておくれ。


Gabriele：ここからだと、市場が全部見える。
Mordek：パンが焼けたにおいも届くよ。
M.N. Popa：それなら、上ってくる前から見つけていました。


Velka：これは宴会場へ持っていくの。
Bony：散歩が配達になってきた。
Tatiana：私たちが運びます。
Lucien：すてきな仲間との配達だね。


Arianna：あの耳を見て……
Tatiana：待って。向こうから来るのを待ちましょう。
M.N. Popa：Tittiはもうわかっているね。


Arianna：あの子、遊びたいんだ！
Gabriele：Titti、僕たちはお客だよ。ここに住みつくわけにはいかないからね。
M.N. Popa：そんな案を教えないでおくれ。


Tatiana：ここでは、明かりが倍になったみたい。
Arianna：水の中の明かりが、みんな揺れてる。
Lucien：少し休みましょう。時間はあります。


Bony：出発したときは、ほんの数人だったのに。
Gabriele：今は市場の半分と一緒に来たみたいだ。
Lucien：あとは扉を開けてくれる人だけですね。


Rudrak：この長椅子はここでいいかい？
M.N. Popa：少し詰めれば、あと二人座れます。
Tatiana：じゃあ、お皿を二枚持ってくるわ。


Gabriele：夕食の分も、おなかを空けておけって言ったよね。
M.N. Popa：空けておいたよ。こんなに必要だとは思わなかったけど。
Tatiana：また話が始まる前に、パンを取ってちょうだい。


Lucien：ここまで遠い道を来てくれた皆さんに。
M.N. Popa：そして、私たちの席を残してくれた皆さんに。
Tatiana：メリークリスマス。

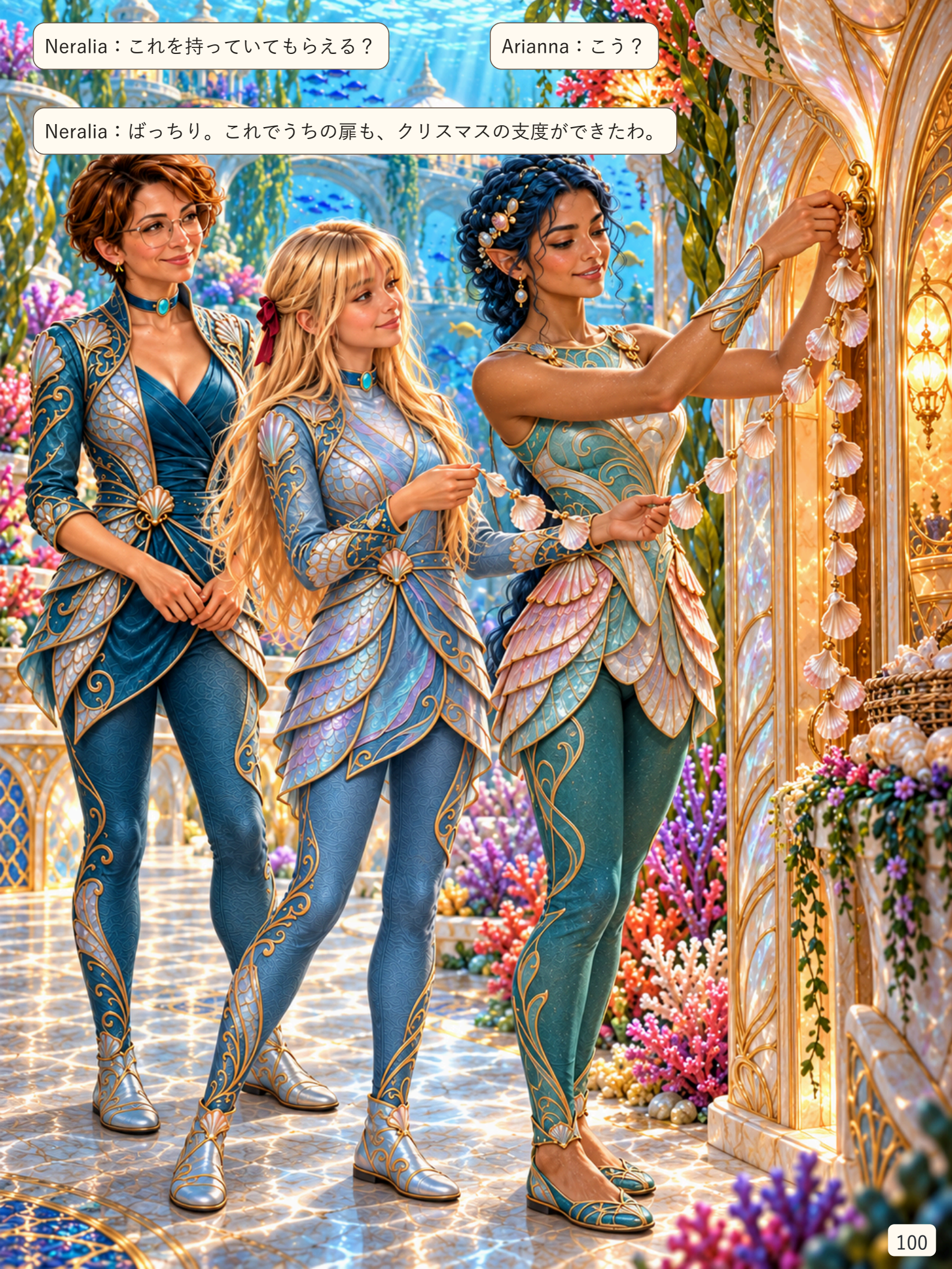

Arianna：ランタンはつけたままにしておく？
Lucien：もちろん。そこがぴったりです。
Bony：よい旅を。Atlantisにもよろしく！
M.N. Popa：必ず伝えるよ。
みんな、メリークリスマス。


Arianna：お母さん、見て！ 扉まで海が来てる。
M.N. Popa：扉が持ちこたえてくれるといいけど。
Aren：もうすぐ、皆さんがその向こうへ渡るのです。


Aren：これは皆さんへの贈り物です。身につけている間は息ができ、私たちと一緒に深い海へ下りられます。
Tatiana：話すことも？
Aren：ええ。寒さや水圧からも守ってくれます。


Arianna：息ができる……お父さん、本当に息ができる！
Gabriele：Tittiはもう行っちゃった。
M.N. Popa：まだ息を止めていたよ。


Tatiana：あんな上にも家があるのね。
Gabriele：ここなら、屋根の上を通って隣の家に行ける。
M.N. Popa：やっと階段を上らなくていい場所に来た。


Neralia：これを持っていてもらえる？
Arianna：こう？
Neralia：ばっちり。これでうちの扉も、クリスマスの支度ができたわ。


Corven：光のほうへ向けてみてください。
Tatiana：さっきは白かったのに……今はピンクと水色だわ。
M.N. Popa：これを広場へ持っていこう。


Arianna：Titti、そっとね。隠れちゃうよ。
M.N. Popa：横に歩くから、どこを見ればいいのかわからないんだね。
Gabriele：やっとTittiを立ち止まらせる相手がいた。


Arianna：飛んでいるみたい。
Talise：ここで待っていて。
そばを通ってくれるわ。
Tatiana：ひれの影が海底に映っているのを見て。


Gabriele：ここからじゃ、太陽がほとんど見えない。
Arianna：でも、下に明かりがいっぱいあるよ。
Aren：止まりましょう。あのテラスからなら、もっとよく見えます。


Orel：お待ちしていました。市場で何か見つかりましたか？
Orel：どうぞ、こちらにまだ場所があります。
Gabriele：これ。どこに置けばいい？


M.N. Popa：待って……何も見えない。
Arianna：お父さん、リボンに選ばれたね。
Tatiana：じっとして。取ってあげる。


Corven：ここに留めて。小片は回れるようにしておいてください。
M.N. Popa：全部動かないようにしていました。
Arianna：これで、どこからの光も受けられるね！


Aren：友よ、メリークリスマス。
Tatiana：Atlantis、メリークリスマス！
M.N. Popa：上の皆さんにも。下の皆さんにも！
Arianna：お父さん、みんな手を振ってくれてる。


Arianna：また歩くのって、変な感じがしそう。
M.N. Popa：階段の上を通れなくなるのが寂しいな。
Aren：また来たくなったら、いつでも案内します。
Tatiana：さようなら、Aren。さようなら、Dely。


Arianna：さっきまで海の下……今度は雲の上！
M.N. Popa：ここは歩けるといいけど。
Kallia：Olympusへようこそ。どうぞ、ご案内します。


M.N. Popa：やっと階段の上を通るのに慣れたのに。
Tatiana：また段数を数えられるわね。
Gabriele：言っちゃだめだよ。一段目で止まっちゃう。


Tatiana：パンのいいにおい！
Kallia：広場の夕食を準備しているところです。
M.N. Popa：ちょうどいい時間に着いたね。


Gabriele：全部、手で描いているの？
Damon：葉っぱを一枚ずつね。
M.N. Popa：私なら二枚目で、
もうしみをつけているよ。


Arianna：近づいてもいい？
Kallia：ええ、ゆっくり。向こうから来るのを待ってね。
Tatiana：ほら、もうにおいをかいでいるわ。


Tatiana：ここからだと、山がどこまで続くのか見えないわ。
Gabriele：庭が浮かんでいるみたい。
Kallia：来てください。紹介したい相手がいるんです。


Arianna：ライオンの体……
それにワシのくちばし。
M.N. Popa：私たち全員を見ているね。
Kallia：ここにいましょう。十分に場所を空けてあげて。


Arianna：Titti、誰がいるか見て。
Tatiana：そっとね。まずはお互いを知りましょう。
M.N. Popa：この子なら、Tittiを見るのにかがまなくていいね。


Gabriele：遊ぼうって誘ってる。
Arianna：Tittiはもう「うん」って。
M.N. Popa：でも、飛ぶ競争はなしだよ。


Melia：この歌、知っている？
Tatiana：いいえ。でも歌いたくなるわ。
Melia：じゃあ今夜、来てね。一緒に歌ってみましょう。


Kallia：この長椅子を運ぶのを手伝ってくれますか？
M.N. Popa：お客さんは何人来るんですか？
Damon：まず、席を少し多めに作っておきましょう。


Gabriele：見せてくれた器だ！
Damon：そうだよ。今度は、もう少し向こうへ回してくれるかい。
M.N. Popa：こんなにパンが入っているなら、喜んで。


Gabriele：おいで、ここが空いてる！
Tatiana：少し詰めましょう。
Kallia：友よ、メリークリスマス。
Arianna：Olympus、メリークリスマス！


Arianna：本当に、最後の目的地まで来たんだね。
Tatiana：どの食卓にも、私たちの席があったわ。
M.N. Popa：でも次は、私たちが招待する番だ。
Kallia：それなら、二人分の席を取っておいてください。


Tatiana：家に帰ってきたわね。
M.N. Popa：今は、誰の席を空けておけばいいかわかるね。

贈り物は続いていく

お祝いの日々と私の物語に意味を与えてくれる家族に、ありがとう。そして、一緒に旅をしてくれたあなたにも、ありがとう。

あなたが温かく迎えられ、誰かのために時間を持てるクリスマスになりますように。もしできたら、招かれると思っていない誰かの席も空けておいてください。

この本で笑顔になれたなら、友達にリンクを送ってください。小さな贈り物も、遠くまで届きます。

公開中の各版は、この本の専用ページで見つかります。
valenelya.com/il-natale-che-unisce-i-mondi
無料でダウンロードでき、リンクを共有することもできます。

次の旅がどこへ続いていても、メリークリスマス。

制作・お問い合わせ

世界をつなぐクリスマス
© 2026 M.N. Popa · VALENELYA
無料デジタル版 · 日本語

原案、物語世界、登場人物、物語構成、創作監修：M.N. Popa。

文章・台詞は、作者の指示と推敲のもと、ChatGPTの支援を受けて制作しました。

イラストは、作者の指示と参考資料に基づき、ChatGPTの画像生成ツールで制作しました。

レイアウトとデジタル版制作：ChatGPTおよびCodexによる支援。

日本語翻訳・表現調整：ChatGPTおよびCodexによる支援。

M.N. Popaは、物語世界VALENELYAの創作者です。公式サイトでは、ほかの物語や無料コンテンツをご覧いただけます。

公式サイト：valenelya.com
本のページ：valenelya.com/il-natale-che-unisce-i-mondi
作者への連絡：info@valenelya.com